

槐

かい

岡井省二創刊

平成18年4月号

平成十八年四月一日発行 第十六巻第四号 通巻第一七八号 (毎月一回) 一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



雪しまる

高橋将夫

まんまろくなつて讃岐の山眠る
寒鴉群れゐて一羽づつなりし
冬蝶の来てやはらかなになる日差し
雪眼鏡かけて凸凹見えてきし

奥の手を握つてゐたる懐手
びつしりとなめこなめこのひとところ
つぶやきがいつしか冬の雷となり
優しさが弱さのクリスマスローズ
邪念なき寒九の水でありにけり
梟のゐて張りつめてゐる空気
やはらかき日ざしに雪のしまりたる

二匹の亀

安岡房子

浮島の入口なりし冬木立
風花や僧徒の列の通り過ぐ
上を向く涸のありけり寒夕焼
葉牡丹の土を拂うてをりにけり
若狭より伊勢に横たふ寒気団
水際に鳥の骸と千両と
蔵王堂に入るや鬼も福も内
篝火の音の向かうや寒明くる
春暁のお百度石を廻りける
釉薬に壺浸しをり鳥雲に

特別作品

白象の瞬きのあり涅槃西風
見得を切る置上げ雛に見られをり
竹林に一条の光^ゲ鳥交む
もも色の外郎のあり春の宵
木ノ芽風蛤御門へ急ぎたり
朧月伸し板に粉打つてゐし
その先は蘭奢待あるおぼろかな
金塊に触れてをりけり花の冷
瑠璃色の二匹の亀や春夕
天こ盛りのボンゴレ食すや山笑ふ

槐安集

市場基巳

生活苦しかりける頃の足袋ばかり
かく冷えて南京黄櫨の実が白し
風あたり強き土塀のからす瓜
たまたま鳩つるべ落しの満濃池
山茶花の飯屋へむかふ夕べあり

水野恒彦

霜柱崩るるときに日の音す
櫟に星瞬きて加速せり
億年のひかりの川面子の日かな
詩心と戀知つてゐる海鼠かな
眠る山まばゆき虚空拡がりて



石脇みはる

神籬のしつらえてあり梅三分
兄の忌や裏山の梅真白なる
千両や石庭に水打つてをる
一月の赤紫の石榴の顆
二ヶ月の鶴上戸空の青

竹内悦子

冬草やこぼれ落ちたる五円玉
初夢の猥が笑うてをりにけり
これはまたむづかしきかな投扇興
もの言ひて寒満月に見られけり
大寒のあららぎの実と雀かな

延広禎一

狐火や木簡にある恋の文字
煮凝の六面体の中に宙
硯海に蓬莱山の水まろき
おらが春弘法利生の酒を酌む
焼蛤一ノ鳥居の春きて

中島陽華

あかつきの何の木の花か太神楽
延年を舞ひ納めたり鏡割
ああと云ひうんと閉じたり仏手柑
河豚雑炊食すやまだまだ死ぬまへん
一月の晩三吉と戌の絵と

栗栖恵通子

きさらぎや踵のあとの濡れてゐる
月輪の幾重なりけり鳩
春近し尻揃へをる楊枝入れ
夜叉面の裏に紅つく薄桜
おちつばき渤海湾を骨壺に

加藤みき

向かひ風おさまつてをり鳥総松
菜の奥に冬のなめくじ動きをり
林中の小さき青空青木の実
探しものは身の内にあり寒満月
包丁をはじく青首大根かな

大島翠木

枕から頭外れて三日かな
どれだけを生きん寒九の水を飲む
長葱や指のぬめりのまつ昼間
笹鳴の櫟を行く女かな
氷らむと草のあはひの水音かな

雨村敏子

呉竹に雀よく来るお元日
寒林の明るさ海に移りけり
ほんだわら三億年の地層かな
人参を引いて帰りの池の端
半伽思惟像人の世に雪降り積む

黒田咲子

黄せきれい山鳩みたり初山河
触れば消ゆ雪巡礼にふりしきる
牛頭山や春子の頭ふたつほど
旧正の揚げて紅白アドバルーン
竜の玉あるかと問はれなほ探る

小形さとる

石峰やしきりに赤き雪の降る
寒蘭のうすくれなゐに私淑せる
うたかたや彼我といふとき冬の虹
眠りぬて嶽の八万四千偈
酢茎漬静処じょうしよよろしと宣のたまへり

槐市集

金澤明子

初釜の道具あれこれ青畳
長塀の裾に波あり鏡餅
焼き海老の身を紅白に明けにけり
旧冬に病と齡忘れきし
去年今年去年今年とて呼気吸気

加藤富美子

ふわふわと白ふくろうの目二つ
雲海に狐の足跡らしきもの
寒椿夢に色なき人とゐる
ましるなる風くる冬の貝の舌
石一つすとんと沈め霜柱

片岡静子

雑煮餅蔵に日射しの見えてきし
初雪や赤き携帯落ちてをり
かん高き声の行き交ふ初御空
風糸の細きに万象ありにけり
初日記雪の降る夜の音の無く

久保東海司

涅槃西風船より落とす厨水
勤行の一喝ありて寒牡丹
凍滝や群青の空あるばかり
鯉が呑み吐きひとひらの春落葉
緋桜の冬芽無数の星呼べり



槐集

高橋将夫選

ぜつたいに沈むことなき寶船 岡崎

近藤 喜子

ちちははの縹に眠き初明り 安城

天野きく江

凍滝や異界の透けて見えてをり
寒雷や一瞬われの過ぎてゆく

冬の日は琥珀の脂にとどまりぬ
一杯の杯とは船ぞ都鳥

オリオンの楯の突つ立つ寒の入
煩惱をあぶり出したる雪をんな

冬の野に孔雀の羽根を拾ひけり
さんざめく地中のものや春の雪

福寿草頤だんだん空に向く 枚方

中野 京子

初日さす大海原の鼓動きく 枚方

近藤きくえ

冬ぬくし猫の尾つぼの角に消ゆ
一本の千切大根真珠光

古文書を開きをるなり切山椒
墨痕のおだやかなりし屠蘇祝ふ

風花の巻かれてゆけり綿の菓子
五日まだ張紙だけの粟餅屋

姥ふたりとつて返して初みくじ
蒼天にひたすら呼気を冬木の芽

初茜海は美神のたたずまひ 岡崎

本多 俊子

裸木となりし黄檗にぬくみあり 谷村 幸子

山見るは空満ちみちて羽子をつく
寒卵日輪近づく韻のしして

形のよき大櫓なり海鼠かむ
左義長の火のつくきわにであひたり

雪景色見えざるもの見えさうな
寒鴉凜として月よぎりける

寒満月余呉の湖あお白し
日当りの桐の木の下若菜つむ

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

寒雷や一瞬われの過ぎてゆく 近藤 喜子

雷鳴の轟きに、一瞬自分を離れる自分を見たという。大事なものは、本当に見たかどうかではなく、別の自分を意識したという点である。決して妄想ではない。例えば、自己嫌悪というのがある。こんな自分分って嫌だなどと冷静に見つめている自分がいる。どちらが本当の自分かと迷う時だつてある。寝めてやりたい自分を見る時だつてある。一体自分分って何？そんな哲学的な思いにかられそうな一句。

実は、ふれておきたい句がもう一句ある。へぜつたいに沈むことなき寶船 喜子である。寶船には七福神の乗ったものが多い、この船が沈むようでは世も末といったとろ。寶船を詠むのに「沈まない」の発想は一体どこから出てきたのだろうか。まこと、感心させられる。

以上、「過ぎゆくわれ」も「沈まない」も見えないところから見つけられたものである。見えないところに何かを見つける、それは創作の苦しみであり、喜びだと思ふ。生みの喜びと苦しみだと思ふ。日常の感動を詠むだけが俳句ではないと思ふ。

一本の千切大根 真珠光 中野 京子
一本の大根を千切りにしたときの美しい白に真珠光を見た感性にうたれた。この句の他にもう一句ふれておきたい句がある。〈冬ぬくし猫の尾つばの角に消ゆ 京子〉である。何の変哲もない。眼目は「猫の尾」である。この表現によって「猫が角を

曲がった瞬間」が見事に切り取られた。

この二句は冒頭の二句と異なり、眼前に見えているものを詠んでいるだけであるが、「真珠光」「猫の尾」には作者ならではの感性と着眼がある。

雪景色見えざるもの見えさうな 本多 俊子
雪晴れのまぶしさ、白色の世界は普段見えないものを見せてくれるかもしれない。見えないものを見る点については、冒頭の句でふれた通りである。

罰といふ麻薬ありけり年の暮 瀬川 公馨
月並みな景をいくら美しく詠んでも、月並みな句に変わりはない。ただごとをいくら過激に表現しても、ただごとに変わりはない。しかし、この「罰といふ麻薬」は真に厳しい内容を持っている。罪に対する罰は犯罪行為に対する応報（応報刑）とする考えや、一般人を犯罪から遠ざけることを目的とする考え（一般予防）や、犯罪者を教育する（教育刑）ことにより社会を防御するという考え（特別予防）がある。しかし、実体はライブドア、耐震構造、性犯罪の再犯等々：いろいろな意味で「麻薬」といいたくもなろう。

さんざめく地中のものや春の雪 天野きく江
初日さす大海原の鼓動きく 近藤きくえ
左義長の火のつくきわにであひたり 谷村 幸子
重さうな荷物隣家の礼者かな 竹中 一花
寒卵ありしところの形而上学 西村 純太
紅白の餅の膨らみ冬木の芽 植木 戴子

薄氷に閉ぢこめられし鳥の羽
凍滝に神氣漂ふ光あり
寒林の色となりたる樵かな
玄室や荒るるばかりの鱗の海
虎落笛鏤骨に青さありにけり
眠る山真つ青な空羽織りたる
あまた橋渡りて冬の銀河へと

近藤 紀子
岩月優美子
中田 禎子
南 一雄
九竜庵 玄
鈴木勢津子
近藤 公子

今回の選評は都合により「日月抄」の作品の一部にとどめた
が、次回からはできるだけ全句にふれたいと思つている。
以下、「日月抄」以外の感銘句を掲出しておく。

三寒に鴉四温に雀来て
初鏡胸三寸にをさめをり
獅子柚子の聖顔して飾らるる
天網やブログに載せる初日記
降る雪やただいつときの綺麗ごと
鼻にびつくり箱を置いてくる
木枯やカラカラカラと星の屑
天空の重心揺らし大根引く

久保東海司
前田美恵子
万城希代子
富松 寛子
谷岡 尚美
松原 仲子
柴田 靖子
奥村 邦子

